史跡高松城跡（玉藻公園）の沿革

高松城は、またの名を玉藻城と呼ばれていますが、その由来は万葉集で柿本人磨が讃岐の国の枕言葉に「玉藻よし」と詠んだことに因んで、このあたりの海が玉藻の浦と呼ばれていたことによるといわれています。

この城は、天正15年（1587年）に、豊臣秀吉から讃岐一国を与えられた生駒親正が、天正16年から香東郡野原庄（篦原）と呼ばれていた現在地を高松と改め築城に着手した平城（水城）です。縄張り（設計）は、当時築城の名手であった黒田孝高（如水）とも細川忠興ともいわれています。瀬戸内の海水を外堀、中堀、内堀に引き込んだこの城は、日本の三大水城のひとつといわれています。城には、本丸を中心に時計廻りの方向に二の丸、三の丸、桜の馬場、西の丸が配され、三重の堀とともに堅固な構えとなっていました。

生駒氏の治世は４代54年間続きましたが、寛永17年（1640年）に生駒騒動といわれる御家騒動により、讃岐一国を召し上げられ、出羽国（秋田県）矢島１万石に移されました。このあと、寛永19年（1642年）に当時常陸国（茨城県）下館藩主だった松平頼重が東讃岐12万石の領主として入城しました。頼重は徳川家康の孫で、徳川光圀（水戸黄門）の兄にあたります。将軍家と近親の関係にあった頼重は中国・四国の監察役を命じられていたといわれています。頼重以降、松平氏の治世は11代228年間にわたり、高松は松平氏の城下町として栄えました。

お城は、明治３年に廃城伺を提出し許可され、一時、政府の所管となりましたが、明治23年（1890年）に城跡の一部が松平家に払い下げになり、昭和20年には松平家から公益財団法人松平公益会に継承され、さらに昭和29年に高松市が譲り受けて、高松市立玉藻公園として昭和30年５月５日から一般に開放しました。現在の玉藻公園の面積は79,587㎡（約２万４千坪）で、往時の城域66万㎡（約20万坪）と比べると８分の１ほどの広さです。城跡には重要文化財の月見櫓、水手御門、渡櫓や艮櫓とともに石垣や堀などが残り、昭和30年３月２日に国の史跡に指定されています。また、高松城は彦根城と姉妹城縁組をしていますが、これは第11代藩主頼聰の奥方として、彦根藩主であった井伊直弼の次女千代姫が輿入れしている縁から、昭和41年に結ばれたものです。

歴代城主一覧表

氏名	世代	城主	襲封	治世	寿	墓所
生駒四代	初代	親正	天正15年８月（1587年）	14年	78歳	弘憲寺（市内錦町）
	2代	一正	慶長６年５月（1601年）	８年	56歳	法泉寺（市内番町）
	3代	正俊	慶長15年３月（1610年）	12年	36歳	法泉寺（市内番町）
	4代	高俊	元和７年６月（1621年）	19年	48歳	竜源寺（秋田県矢島町）
松平十一代	初代	頼重	寛永19年２月（1642年）	32年	74歳	法然寺（市内仏生山町）
	2代	頼常	延宝元年２月（1673年）	32年	53歳	霊芝寺（志度町）
	3代	頼豊	宝永元年２月（1704年）	32年	56歳	法然寺
	4代	頼桓	享保20年12月（1735年）	５年	20歳	法然寺
	5代	頼恭	元文４年９月（1739年）	33年	61歳	法然寺
	6代	頼真	明和８年８月（1771年）	10年	38歳	法然寺
	7代	頼起	安永９年４月（1780年）	13年	46歳	法然寺
	8代	頼儀	寛政４年９月（1792年）	30年	55歳	法然寺
	9代	頼恕	文政４年５月（1821年）	22年	45歳	霊芝寺
	10代	頼胤	天保13年５月（1842年）	20年	68歳	伝通院（東京都）
	11代	頼聰	文久元年７月（1861年）	11年	70歳	法然寺

開園時間

	公園の開園時間	
	西門開門時間 日の出～日没	東門開門時間
４月～５月	５時30分～18時30分	7時　～18時
６月～８月	５時30分～19時	
９月	５時30分～18時30分	
10月	６時　～17時30分	8時30分～17時
11月	６時30分～17時	
12月～1月	７時　～17時	
２月	７時　～17時30分	
３月	６時30分～18時	

休園日　12月29日～12月31日

入園料

	普通	団体
大人（16歳以上）	200円	140円
小人（６歳以上 16歳未満）	100円	70円

団体は20人以上

定期入園券

大人（16歳以上）	1,200円
小人（６歳以上 16歳未満）	600円

1年間有効

総面積 79,587.44㎡

堀	22,608.00㎡
庭園	55,602.79㎡
駐車場（無料57台）	1,376.65㎡

年間行事

年始無料開放	１月１日～１月３日
春の植木市	３月上旬～４月上旬（予定）
桜見物夜間無料開放	４月上旬（予定）
一般開放記念無料開放	５月５日
菊花展	10月中旬～11月中旬

問い合わせ

〒760－0030 香川県高松市玉藻町２番１号
玉藻公園管理事務所
TEL 087－851－1521　FAX 087－823－6390
http://www.takamatsujyo.com/

指定管理者：香川県造園事業協同組合　主管課：高松市創造都市推進局文化財課

園内のみどころ

① 旭橋と旭門

かつて、城の南側の桜の馬場の南中程に大手門がありましたが、寛文11年(1671年)頃、三の丸に藩主の住居である旧披雲閣が建てられたため、これを廃して新たに東に旭橋を架け、それを渡って旭門から出入りするようになりました。旭門を入ったところにある巨石を積み重ねてつくられた桝形は、攻め込んだ敵を包囲するためのものです。桝形の北面には埋門があり、南側には太鼓御門がありました。

② 艮 櫓（旧太鼓櫓跡）

［昭和25年8月29日重要文化財指定］

艮櫓はもともと東の丸の北東の隅（現在の県民ホール敷地内）にあった櫓で、北東の方角を丑寅ということからこの名前があります。完成は延宝5年（1677年）といわれ、月見櫓と同時期につくられました。三重三階・入母屋造・本瓦葺で、形は月見櫓と似ていますが、初重に大きな千鳥破風があるのが特徴です。昭和40年に当時の所有者であった旧国鉄より高松市が譲り受けて、2年の歳月をかけて、東の丸より旧太鼓櫓跡に移築されました。

③ 桜の馬場

かつては今の2倍ほどの広さがありました。現在は桜の木が植えられており、春は花見の人で賑わいます。

④ 桜御門跡

三の丸入口の櫓門で昭和20年（1945年）の高松空襲により焼失しました。石垣には火災により赤く焼けた痕跡や、地面に残る礎石には柱に使用された金具の錆跡が茶色く残り、往時の姿を偲ぶことができます。

⑤ 陳列館

高松城や歴代藩主等に関する文化財や資料、模型、古写真等を展示しています。国宝詩懐紙藤原佐理書（複製）高松城天守閣鯱（複製）高松城・城下町模型、取壊し前の高松城天守閣写真を含む明治時代の高松城周辺を撮影した写真（平成17年、英国ケンブリッジ大学図書館）天守台発掘調査写真パネル等

⑥ 披雲閣

〔平成24年7月9日　重要文化財指定〕

延床面積は1,887㎡。

松平藩時代にも現在の場所に披雲閣と呼ばれる広大な建物（現在の約2倍）がありました。藩の政庁及び藩主の住居として使われていましたが、明治時代老朽化により取り壊され、その後、3年の歳月と当時のお金で15万余円の巨費を投じて、大正6年（1917年）現在の披雲閣が完成しました。

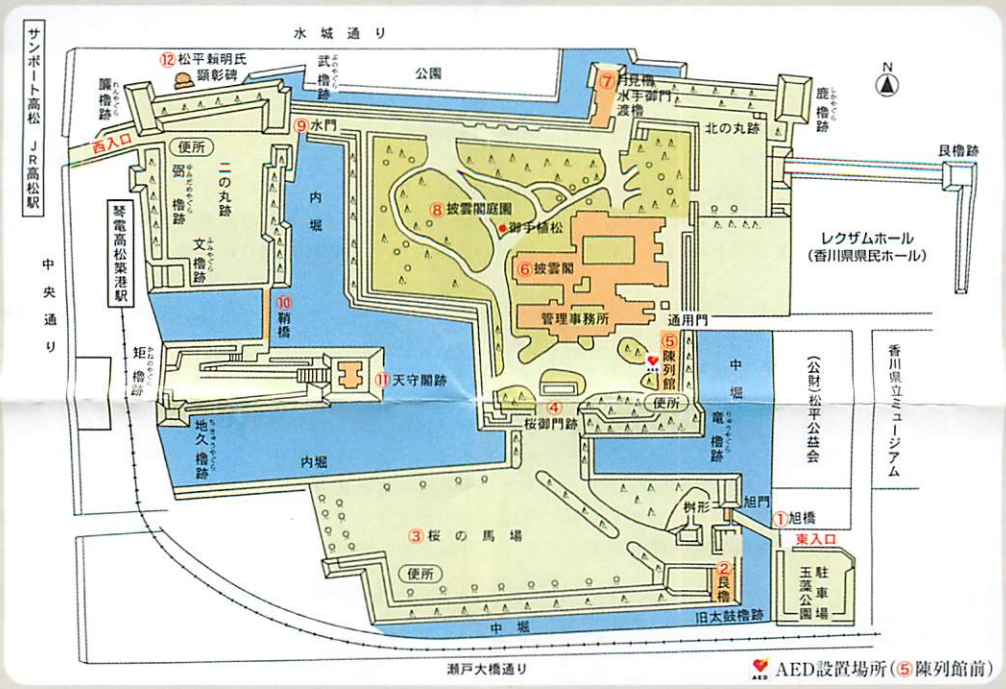
披雲閣には142畳敷の大書院をはじめ、槇の間、松の間、蘇鉄の間など雅致を生かした部屋があり、波の間には、昭和天皇・皇后両陛下が宿泊されました。第2次世界大戦後しばらく占領軍に接収されていましたが、高松市が譲り受けてからは、貸会場として会議、茶会、華展などに利用され、市民に親しまれています。

⑦ 月見櫓・水手御門・渡櫓

［昭和25年8月29日重要文化財指定］

月見櫓は北の丸の隅櫓として延宝4年（1676年）頃に完成したといわれ、出入りする船を監視する役割を持つとともに、藩主が江戸から船で帰られるのをこの櫓から望み見たので［着見櫓］ともいわれています。総塗籠造りの三重三階・入母屋造・本瓦葺で、初重は千鳥破風、二重は唐破風と屋根の形を対象させています。

月見櫓に連なる薬医門様式の水手御門は、いわば海の大手門です。



⑪ 天守閣跡

生駒氏時代の天守は、絵図や古文書によると3重だったとされています。松平氏時代の寛文10年（1670年）に改築された天守は3重5階（3重4階＋地下1階）の南蛮造りで四国最大の規模を誇っていましたが、明治17年（1884年）老朽化を理由に取り壊されました。平成17年から天守台修復工事が行われ、発掘調査の結果地下1階部分から58個の礎石が当時のまま現れました。平成25年修復工事も完了し、今後天守閣復元に期待がかかっています。

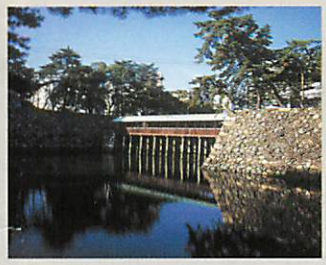
⑧ 披雲閣庭園

〔平成25年10月17日　名勝指定〕

この庭は披雲閣の建築にあわせて、大正6年（1917年）頃作造された枯山水の庭で、江戸時代の三尊石や重さ11トンといわれる手水鉢、昭和天皇・皇后両陛下お手植えの松などがあります。

⑨ 水　門

この城は堀が海とつながっているので、潮の干潮による水位調節のため水門が設けられています。堀にはタイやチヌなど海の魚がいて、エサやり体験が楽しめます。



⑩ 鞘　橋

本丸と二の丸を結んでいる唯一の連絡橋で、当初は欄干橋でしたが、江戸時代中期末頃にはこのような屋根付の橋になっていたようです。

水戸黄門と松平頼重

テレビドラマなどで有名な水戸黄門（徳川光圀）は初代藩主松平頼重の同腹の弟にあたります。松平頼重は、徳川家康第11男の水戸藩祖徳川頼房の長男として生まれながら、運命のいたずらから、次男である光圀が水戸徳川家を継ぐことになりました。光圀自身も次男である自分が兄を差し置いて水戸藩主となったことを悔やんで、自分の跡取りに頼重の子（綱條）を迎えて水戸藩主としました。一方、頼重も光圀の子（頼常）を高松藩主としました。以後、明治維新になるまで養子縁組を繰り返しました。

官休庵（武者小路千家）と松平家

高松松平藩と茶道三千家のひとつ武者小路千家は、始祖千宗守が高松藩祖松平頼重に茶頭として仕えて以来、茶の湯を通じて今日も強く結ばれています。松平家が所有する楽焼茶碗「木守」は、千利休が作らせたもので、歴代の武者小路千家当主が「宗守」を襲名する披露茶会には必ず使用され、そのときには武者小路千家から松平家に、拝借の使者が立てられます。

松平家の泳法

高松藩祖松平頼重は高松城に入城すると「讃岐の国は海辺の国なれば水練は武道の一班たるべし」と、藩士の今泉八郎左衛門に命じ、御船蔵西の堀溜（現ＪＲ高松駅構内）にて藩士に水練の指導をさせました。頼重自らも、入府の年の６月に城内の内堀で泳がれたとの記録もあります。

高松藩の水術は水戸藩の水術である水府流を源流とし、「高松御当所流」と呼ばれていましたが、やがて「水任流」が正式名称とされ、昭和53年４月に松平家第13代松平頼明氏を会長とした水任流保存会が結成され、毎年６月第１日曜日に英公（初代頼重の諡）を偲んで追悼游泳祭を行っています。また、松平頼明氏が水任流保存会を結成して日本泳法の保存に努め、水任流は昭和54年高松市無形文化財第１号に指定されたことの偉業を称え、二の丸北側（園外⑫）に水任流保存会初代会長松平頼明氏顕彰碑が建てられています。